

サークルと体育会運動部における比較研究  
ー運動経験及びライフスタイル形成の観点よりー

スポーツ科学課程 97-218 島方大輔

## I. 研究動機・目的

近年、大学においては、スポーツ系クラブのあり方が大きく様変わりしつつある。従来からある大学を代表する体育会運動部が存在しているが、サークルに所属する学生が多くなる傾向が認められるようになってきた。このような状況の背景には、急速な時代変化とともに、大学生のライフスタイルも著しく変容し体育会運動部への集団参加を受け入れがたくさせていると言える。

そこで本研究では、課外活動にバスケットボールを選択しているサークルと体育会運動部に所属する学生の運動経験及びライフスタイル形成（時間・金銭・動機など）の差異の2つの観点から、課外活動選択の理由を明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

K 大学に在学する学生のうち、バスケットボールサークル所属の学生 26 名、バスケットボール部所属の学生 37 名、計 63 名を対象とした。ここで、サークルという定義の難しい集団を用いて研究を行うため、調査の対象を「ほぼ活動に参加している学生」とし、「幽霊部員」となっている学生は調査対象外とした。

### 2. 調査期間

平成12年12月12日～18日

### 3. 調査方法

サークル、体育会運動部のそれぞれの練習中に、直接練習場に行き、注意事項を説明したあと、調査票を配付した。また調査の結果、両方の集団において大学課外活動でのバスケットボールにおける「開始」「継続」「中断」の経験がみられる学生にインタビューを実施し、考察の手助けとした。有効回答数は 60 であり、回収率は95.2%であった。

### 4. 調査内容

- 1) 調査対象者の基本的属性
- 2) 運動経験（中学・高校・大学期）
- 3) アルバイト実施状況（回数・収入など）
- 4) 生活の支出

5) 生活時間（睡眠時間・欲求時間など）

6) ライフスタイルに関する 24 項目

## 5. 分析

分析においては、金銭・時間に関する項目及び、ライフスタイルに関する 24 項目についてすべて平均値で表した。それ以外の項目はすべて百分率（%）で表した。サークルと体育会運動部の平均値の差の検定には unpaired t-test を用い、有意水準は  $p < 0.05$  とした。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 運動経験

高校課外活動では体育会運動部の学生のほとんどがバスケットボールを経験しており、中学課外活動での結果と同様にサークルでは体育会運動部に比べ、より多くの種目経験がみられた（表 1）（表 2）。また中学・高校時と課外活動で一貫してバスケットボールを経験している学生を調べたところ、サークルでは 9 人（37.5%）、体育会運動部では 27 人（75.0%）であった。また中学課外活動でバスケットボールを経験し一度中断している学生は、サークルでは 5 人（20.8%）であるのに対し、体育会運動部では 1 人（2.8%）であった。これらより、中学・高校必修クラブ活動は大学課外活動の選択にはほとんど影響せず、中学・高校と継続して課外活動にバスケットボールを選ぶ学生は、大学時に体育会運動部に所属する傾向が強いように思われる。さらに中学時に課外活動でバスケットボールを経験していて、大学入学後に再びバスケットボールを行う場合、体育会運動部ではなくサークルに所属する可能性が高くなるようだ。

### 2. アルバイト実施状況

実施回数（サークル 10.9 回、体育会運動部 6.9 回）と収入（サークル 53,333 円、体育会運動部 33,806 円）で有意差が認められた（図 1）（図 2）。体育会運動部の学生では今以上にアルバイトを多くしたいとは思っているが、課外活動が影響して思うようには実施できていないようである。また体育会運動部の中でもアルバイトを多く実施している学生からのインタビューによれば「夜遅くのアルバイト実施により翌日の課外活動に影響する」とのことから、調査期間では実施していたアルバイトを現在は行っていないとの話を聞くことができた。

### 3. 生活時間

平日課外活動休養日では就寝時刻、起床時刻ともほぼ同じであるが、平日課外活

動実施日では就寝時刻で1時間7分、起床時刻で49分の差がみられた。土曜日に活動のないサークルでは金曜日の活動後に時間があるが、土曜日に活動のある体育会運動部では金曜日の活動後は休養のために睡眠を多くとる必要があるためにこのような結果があらわれたと思われる。

サークルと体育会運動部ともに「大学生活を充実させるため」という目的が参加動機の共通の理由となっているが、これ以外の参加動機ではかなりの違いがみられた。まず「健康増進のため」「技術向上のため」の結果からサークルでは、技術の向上をそれほどは望んではないが、ある程度の運動強度で体を動かしたいと考え、体育会運動部では技術の向上と共に体を鍛えたいとの考えが推察される。要するに、活動に対してサークルでは健康増進をダイエット的な考えでとらえているのに対して、体育会運動部ではトレーニング的な考えでとらえているように思われる。

#### 4. ライフスタイルに関する24項目

サークルと体育会運動部の間において、「長期休暇はとりやすい」（サークル 0.54, 体育会運動部-1.44）、「くつろげる時をつくろうとしている」（サークル 0.28, 体育会運動部-0.44）、「休講日には関心事のみする」（サークル 0.88, 体育会運動部 0.03）、「スポーツは気晴らし程度のものだ」（サークル 0.46, 体育会運動部-0.94）の4つの項目で有意差が認められた。課外活動を行う大学生のライフスタイル形成において、時間という項目が大きな割合を占めているように感じる。

#### IV. 結論

本研究では、運動経験及びライフスタイル形成の差異の2つの観点から、課外活動選択の理由を明らかにすることを目的として研究を行った。

1. 中学・高校課外活動で継続して同一種目を経験する学生は、大学課外活動では体育会運動部を選択する傾向が強いようである。また中学時の課外活動で行っていた運動種目を中断し、大学時に再開しようとする場合、体育会運動部ではなくサークルを選択する可能性が高くなることが考えられる。

2. サークルには体育会運動部と比べて多くの自由時間が存在しているようだが、サークルと体育会運動部のどちらの学生も同様に慢性的な時間不足を感じているようである。ライフスタイル形成においての課外活動の価値の差異が所属に関係しているとの結論を導いた。

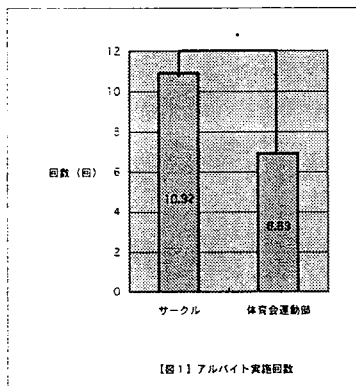
【表1】 中学課外活動経験

サークル

	人数	%
バスケットボール	14	58.3
バレーボール	3	12.5
サッカー	2	8.3
野球	1	4.2
卓球	1	4.2
剣道	1	4.2
弓道	1	4.2
吹奏楽	1	4.2
合計	24	100.0

体育会運動部

	人数	%
バスケットボール	31	86.1
ハンドボール	2	5.6
野球	1	2.8
バレーボール	1	2.8
弓道	1	2.8
合計	36	100.0



【表2】 高校課外活動経験

サークル

	人数	%
バスケットボール	11	45.8
なし	4	16.7
サッカー	2	8.3
バレーボール	1	4.2
硬式テニス	1	4.0
軟式テニス	1	4.0
バドミントン	1	4.0
剣道	1	4.0
弓道	1	4.0
フィールドホッケー	1	4.0
合計	24	100.0

体育会運動部

	人数	%
バスケットボール	33	91.7
なし	2	5.6
野球	1	2.8
合計	36	100.0

